

令和5年度

群馬大学地域貢献事業 報告書

地域と共に歩む大学を目指して



群馬大学
GUNMA UNIVERSITY

地域と共に歩む大学を目指して

国立大学法人群馬大学は、教育・研究活動とともに、地域貢献にも力をいれています。コミュニティの一員として、地域と共に歩む大学を目指し、地域貢献活動に組織的に取り組んでいます。

活動内容は、人材育成、地域課題、住民サービス、医療・保健・福祉、産学官連携、文化交流、小中学生に対する理科体験教室など、多方面にわたっています。各種イベントや公開講座などを通して、本学の教育研究の成果を社会に還元し、地域住民の幅広いニーズに応えるとともに、地元群馬の発展のために努力しています。

本学の地域貢献活動は、学長のリーダーシップのもと、地域連携推進室を中核として、学内外の各組織や教員個人などと連携し、事業を実施しています。学長裁量経費の中から社会貢献事業経費を措置して、学内でテーマを公募し審査の上、優秀な事業に対して助成しています。本報告書は、こども体験教室「群馬ちびっこ大学」、地域貢献シンポジウム、公開講座及び地域貢献事業について、地域の皆様に紹介します。

また、本報告書には掲載しておりませんが、各学部等においても多数の地域貢献活動を実施していることを付記します。

地域連携推進室長

地域連携推進室主催地域貢献事業

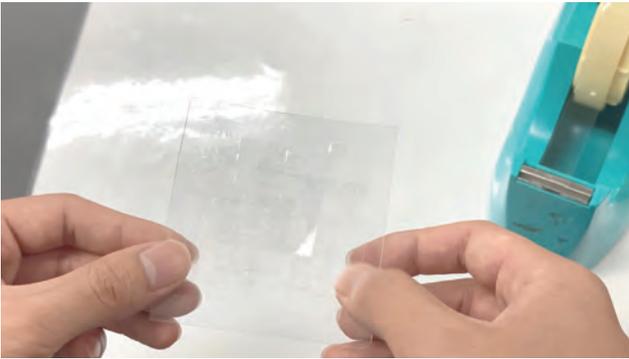
事業名	担当学部等	担当学科等名	担当者	掲載ページ
こども体験教室「群馬ちびっこ大学」	全学部等	地域連携推進室 他	花屋 実 理事	2
公開講座	各学部等	地域連携推進室 他	花屋 実 理事 各実施責任教員	4
障害のある子どもたちの スポーツ体験プロジェクト —群馬の自然と人を愛する心を育てる—	共同教育学部	保健体育講座 特別支援教育講座	木山 慶子 教授 田井健太郎 准教授 中雄 勇人 准教授 小山 啓太 准教授 島 孟留 准教授 霜田 浩信 教授	5
本のまちづくりを目指した書籍の 作成と配布	情報学部	情報学科	柴田 博仁 教授	6
群馬県でがん教育を推進するために	情報学部	情報学科	片山佳代子 准教授	7
ユース・メンタルヘルスの 「医療・教育連携ネットワーク」の構築	医学系研究科	神経精神医学分野	福田 正人 教授	8
栄養管理と運動：群馬県の自然環境を 生かした健康増進研修	医学系研究科 医学部附属病院	麻酔神経科学分野 集中治療部	齋藤 繁 教授	10
救急救命士向けの病院前周産期救急対応 講習の開催	医学系研究科 医学部附属病院	産科婦人科 小児科 周産母子センター 救急科	田中亜由子 医員	11
ゲノム医療の地域社会実装に資する ゲノム科学教育のための教材開発	医学系研究科 共同教育学部	教育研究支援センター	大日方 英 准教授	13
ゲノム医療に向けた群馬県遺伝子診療体制の構築 (群馬県ゲノム医療対策会議の設立と活用)	医学系研究科 保健学研究科 医学部附属病院	看護学	小澤 厚志 教授	15
群馬県軟式野球選手を対象にした 成長期スポーツ障害検診・ 群馬県高校野球投手メディカルチェック	保健学研究科	リハビリテーション学	田鹿 毅 教授	17
学生保健サポーターによる 地域ボランティア体制の構築	保健学研究科	地域保健推進室	佐藤 由美 教授 他	20
一般大学生向け情報セキュリティ講習 の作成	総合情報メディアセンター		西村 淑子 センター長	23
高校生のための最先端生命科学& 重粒子線医学セミナー	生体調節研究所 重粒子線医学研究センター		佐々木伸雄 教授 大野 達也 センター長	24
重粒子線治療の施設公開と公開講座	重粒子線医学研究センター		大野 達也 センター長	26

第18回こども体験教室「群馬ちびっこ大学」

1. 目的：近年、子どもたちの実体験を通じた学習機会が少なくなっている。
体験的学習を通じて、五感で学問の面白さ、奥深さを実感してもらい、将来の日本、世界を担う人材の若い芽を育むことを目的とする。
2. 事業内容：子どもたちが自宅等で体験学習できる動画を作成し、夏休み期間の都合の良い時間帯に視聴できるようにYouTubeを利用してオンデマンド配信を行う。
3. 対象：小学生、中学生とその保護者、教員、一般の方々
4. 期間：令和5年8月2日(水)～22日(火)
5. 主催・後援・協力・協賛
 主催：群馬大学
 後援：群馬県、群馬県教育委員会、前橋市、前橋市教育委員会、桐生市、桐生市教育委員会、放送大学群馬学習センター、上毛新聞社、高崎前橋経済新聞、群馬テレビ、FM GUNMA
6. 再生数：8,662回
7. 実施担当等：企画・運営等担当 群馬ちびっこ大学実施委員会
 動画編集担当 TAKE2
 広報担当 総務部総務課広報係
 チラシデザイン・事務担当 研究推進部産学連携推進課



8. 群馬ちびっこ大学 実施風景



偏光板を通して見てみよう



さかなの宝石！耳石をさがそう！



マイコンを使ってあそんでみよう



外がゼリー状で中が液体のカプセルができる

おいしい人工イクラをご家庭で



AIで歴史上の偉人を復活させよう！



きれいな塩の結晶を作ろう

公開講座

Aコース「一般市民」対象

講座名	期間	学部等	実施責任者
オンライン授業で学ぶ手話とろう文化	9日間	共同教育学部	金澤 貴之・教授
企業・産業分析スキル特論(金融ビジネスの基礎から実際まで)	9日間	情報学部	杉山 学・教授
おとなが学ぶプログラミング!	1日間	情報学部	岩井 淳・教授
食の栄養機能と代謝調節	5日間	食健康科学教育 研究センター	粕谷 健一・教授
オンデマンド教材で学ぶ手話とろう文化	—	共同教育学部	金澤 貴之・教授
運動の生体調節作用	5日間	食健康科学教育 研究センター	粕谷 健一・教授
生物統計とデータ解析	6日間	食健康科学教育 研究センター	粕谷 健一・教授
英語の本を読もう	1日間	大学教育・学生支援 機構	磯崎アンナ・講師
国際協力、はじめの一步!	1日間	保健学研究科	辻村 弘美・准教授
健康保険の「これまで」と「これから」	1日間	医学系研究科	森 禎徳・講師
映画「ここに泉あり」(1955)の時代—映像作品と地方政治	1日間	情報学部	北村 純・准教授
食品の科学「農作物から食品生産まで」	1日間	食健康科学教育 研究センター	粕谷 健一・教授
食事で健康を科学する	2日間	食健康科学教育 研究センター	粕谷 健一・教授
第30回アレルギー週間事業 アレルギー市民公開講座・相談会	1日間	保健学研究科	久田 剛志・教授

Bコース「専門技術者」対象

講座名	期間	学部等	実施責任者
聴覚障害児の理解	—	共同教育学部	金澤 貴之・准教授
聴覚障害児の教育課程・指導法	—	共同教育学部	金澤 貴之・教授
ろう重複障害児・者の教育と支援	—	共同教育学部	金澤 貴之・教授
高校生サイエンスインストラクター育成プログラム①②	4日間	理工学府	佐伯 俊彦・助教
日本手話の文法を学ぶ	—	共同教育学部	金澤 貴之・教授
「地域における日本語支援」支援講座	5日間	大学教育・学生支援 機構	牧原 功・准教授

共同教育学部

障害のある子どもたちのスポーツ体験プロジェクト —群馬の自然と人を愛する心を育てる—

担当学科等 保健体育講座・特別支援教育講座

担当者 木山 慶子 教授・田井 健太郎 准教授・中雄 勇人 准教授・小山 啓太 准教授・島 孟留 准教授・霜田 浩信 教授

●事業概要

本事業の目的は、障害のある子どもたちに自然の中で運動することの喜びや楽しさを実感してもらうこと、さらに群馬にあるスキー場を利活用すること、であった。

実施内容については、群馬県内のスキー場において、障害のある子どもたちを対象とした雪遊び・スキー教室を開催した。

参加者は、おもに群馬県在住の障害のある子どもたちであった。指導者および支援者は、群馬大学共同教育学部教員と同学生、さらに現職教員や他大学の教員にも指導者として参加いただいた。

●実施事業等

事前説明会、学生対象の研修会、対象の子どもたちのための2回の教室を実施した。

1. 事前説明会

令和5年12月23日 13:00 - 14:30

荒牧キャンパス

大学教員5名、学生10名、児童生徒15名および保護者15名の約40名が参加し、事前説明会を実施した。説明した内容は、スタッフの紹介や教室の活動内容等であり、全体説明の後、グループに分かれて、参加児童生徒の様子を保護者から聞き取ったり、配慮すべき点について確認したりした。

2. 学生研修

令和6年1月12日 9:00 - 16:00

軽井沢スノーパーク

教員7名、学生14名が参加し、研修を実施した。教員が指導者となり、まずは学生自身のスキー技能向上を目指した。加えて、障害のある子どもたちに対する指導法について学んだ。

3. 教室

第1回：令和6年1月20日 12:00 - 16:00

軽井沢スノーパーク

教員7名、学生13名、児童生徒15名が雪遊び班とスキー班に分かれ、活動した。児童生徒それぞれの実態に合わせた目標に挑戦した。

第2回：令和6年2月17日 12:00 - 16:00

軽井沢スノーパーク

教員スタッフ7名、学生12名、児童生徒15名が雪遊びやスキーを楽しんだ。



教室(1/20、2/17、軽井沢スノーパーク)

●本事業の成果

長らくコロナ禍により、障害のある子どもたちの活動は大きく制限され、体力の低下や人との対面でのつながりが希薄になったことによる心の問題が危惧されている。よって、子どもたちが自然の中で仲間とともにスキーや雪遊びを体験する活動は、運動や友だちと交流することの楽しさ・喜びを味わいながら、体力を向上させ、健やかな心身の育成を促すことにつながった。

また、群馬には多数のスキー場がある。それらを活用することによって、身近にある地域の自然を感じ、地域の人ともつながりをつくることができた。

さらに、共同教育学部の学生が、障害のある子どもたちとかわり、その支援の方法を学ぶことができた。

本のまちづくりを目指した書籍の作成と配布

担当学科等 情報学科
担当者 柴田 博仁 教授

● 事業概要

群馬大学 読み書きラボ (柴田研究室と平田研究室の共同ラボ) では、前橋での「本のまちづくり」を目指して、前橋ブックフェスでイベントを開催したり、学外向けのシンポジウムを開催してきた。

本事業では、「本のまちづくり」の一環として、読んだら群馬に来たくなるような群馬を舞台にした小説を企画・執筆・製本して配布する予定である。本の制作では、学生とともに群馬県内を散策し、群馬の隠れた魅力を探し出し、それをベースに小説を書く。

書籍の完成予定は2024年11月。2025年3月までに、県内の小中学校、図書館、書店、観光案内書などへの配布を想定している。

● 実施事業等

- ・群馬に関する書籍 (ガイドブック、歴史書、小説、マンガなど) を調査した。
- ・群馬の魅力を探るため、群馬県内の観光スポットを見学・取材：群馬県立歴史博物館、磯部温泉、伊香保温泉、神流町恐竜センター、高崎市立美術館、水上温泉。
- ・本の美術館として角川武蔵野ミュージアムを見学した。
- ・本のまちづくりを行っている敦賀市の書店「ちえなみき」を見学し、福井大学主催のまちづくりのシンポジウムに参加した。
- ・前橋市内の中学校を訪問し、図書館を見学。中学生の読書実態を調査した。
- ・文献調査や取材・見学をもとに、紀行文や物語を執筆。現在、HPを準備中であり、執筆した紀行文や物語はHPで公開していく予定である。また、2024年11月を目標に書籍を制作する予定であり、その中にも活用していく予定である。

● 本事業の成果

本事業は2024年11月の書籍の発行を目標にしており、現在はその途上にある。この半年間、必要な文献を調査し、群馬県内の観光スポットや書籍を取り扱う施設を見学した。これにより、メンバーが群馬のことをよりよく知る機会となり、また書籍の執筆に向けての意識が向上した。また、本を用いたまちづくりの具体的なイメージを持つことができた。

本事業は、今年11月の書籍発行を目指しているため、今のところ、現物や広報などの具体的成果はない。しかし、本づくりプロジェクトは毎年進めているものであり、2024年3月卒業予定者が2023年11月に発行した書籍『つむぐ』については、上毛新聞をはじめ10紙以上の新聞紙とテレビ、ラジオ局がプロジェクト活動を紹介してくれた。2024年11月に発行される予定の書籍についても、同程度、あるいはそれ以上の広報の成果を見込んでいる。

また、発行した書籍を県内の関係者に配布することで、本のまちづくりのネットワークを構築していく予定である。

群馬県でがん教育を推進するために

担当学科等 情報学科
担当者 片山 佳代子 准教授

●事業概要

2012年に閣議決定された第2期がん対策推進基本計画に初めて「がん教育・普及啓発」という施策が盛り込まれ、続く第3期、第4期がん対策推進基本計画でもその他の施策を支える重要な基盤施策としてがん教育は位置付けられている。これを受け、文部科学省は学習指導要領の改正に伴って、小学校では2020年度から全面实施となり、中学校では2021年度から、高等学校では2022年度から主に「保健」の授業を通して必修化されている。

また、がん教育は外部講師（医療者・がん経験者）を活用することが有効とされているが、今のところ、群馬県においては未だ体系的、組織的に実施できていない状況にあるため、県内で「がん教育を推進するための冊子」を作成し、普及啓発に努めることとした。



●実施事業等

- ① 令和5年度群馬県中堅養護教諭研修及び健康教育研修講座にて「2023群馬県におけるがん教育の進め方」講演を実施した。（於：群馬県総合教育センター 7月26日対面実施）
- ② 沼田市薄根小学校5-6年生＋その保護者を対象にがん教育を外部講師として実施した。（2023年11月12日実施）
- ③ 沼田市立薄根小学校のがん教育の第2段階として、がん経験者をがん教育外部講師として派遣した。（2024年2月9日）



●本事業の成果

- ① 県教育委員会がまとめた研修会の養護教員からのフィードバックを以下に転記する。
受講者からは「がん教育を進める上での考え方、大切にすべきことがイメージできてよかった。『知識と意識』を頭におきながら、進めていきたいと思う」
「なぜ今、がん教育なのか、すごくよくわかった。」「がん教育を指導していく上での考え方や根本的な柱のようなものを示していただけだと思います。がん教育は難しい点が多いと感じますが、今後の指導に生かして行きたい」等々、大変高評で、がん教育の理解や進める上でのヒント、またHPVワクチンの有効性、安全性等についても理解を深めることができたようです。
- ②③ 小学校でのがん教育実施後、児童のみならず教員からも「実施してよかった」と評価をいただいた。当該小学校では定期的な実施を検討していくこととなり、継続的に地域の小学校でがん教育を実施する例は群馬県内では初である。この成果はすぐに目に見える形で示すことは難しいが、教育という一次予防の種まきは長い目で見て、その地域のソーシャル・キャピタル指数やがん統計に示されると考えている。



医学系研究科

ユース・メンタルヘルスの「医療・教育連携ネットワーク」の構築

担当学科等 神経精神医学分野
担当者 福田 正人 教授

● 事業概要

本事業は、ユース世代の最大の健康問題がメンタルヘルスであることにもとづき、未来の社会を担う中・高・大学生の精神的健康の向上に取り組むネットワークを群馬県内に構築し、その成果を発信することを目的とした。

2022年度より高校保健体育で精神疾患教育が始まったことは、ユース世代におけるメンタルヘルスの社会的重要性を象徴的に示している。ユース世代のメンタルヘルスの向上のためには、精神保健医療福祉の専門職と、ユース世代が日々を過ごす学校の教育関係者の連携が不可欠である。これまで県教育委員会・養護教諭会・学校現場と築いてきた共同を発展させ、ユースメンタルヘルスについての「医療・教育連携ネットワーク」の構築を目指した。

取り組んだ事業は3点である。

第一は、「連携で支えるユースメンタルヘルス」をテーマとした第79回精神保健シンポジウムの開催である。

第二は、教育関係者向けの専門紙「教育新聞」における「ユースの心と命を大切にすると題した10回連載記事の執筆担当である。

第三は、教員向けの冊子「保健体育の精神疾患教育に携わる高校教師のために—ユースの心と命を大切にすると題した冊子の作成である。

● 実施事業等

【精神保健シンポジウムの開催】

7月8日に群馬大学医学部基礎講堂で開催した本シンポジウムは、日本精神衛生会との共催で、群馬県・群馬県教育委員会・群馬県精神保健福祉協会の後援を得た（資料①・ポスター）。教育・医療・福祉・行政関係者など約100名が参加した（資料②・会場写真）。

シンポジウムでは、医療の立場からは精神科と小児科、学校の立場からは小学校校長と高校養護教諭、教育の立場からは特別支援教育の方々が登場し、現場での経験について発表を行った。当日の記録が、日本精神衛生会の機関誌『心と社会』に56頁にわたって掲載となった（資料③・心と社会）。

【教育新聞の連載】

高校の保健体育での精神疾患教育について、教育関係者向けの専門紙『教育新聞』に、デジタル版は4～5月に、紙面版は9～10月に10回の連載を行った（資料④・教育新聞）。高校教員が精神疾患教育を担当するうえでのポイントを、専門家の立場からまとめた。

【教員向け冊子の作成】

上記した新聞連載記事を踏まえて、保健体育で精神疾患教育に携わる高校教師向けの冊子を作成した。紙媒体のものを配布するとともに、PDFファイルを公開し、全国の教育関係者や医療関係者が利用可能とした（資料⑤・冊子）。

● 本事業の成果

精神保健シンポジウムは、コロナ感染症が5類に移行したことにより、対面で開催できた。教育・医療・行政の連携を進めるうえで不可欠な、対面での交流にもとづく親密な関係が実現でき、今後のネットワーク構築の大きな足掛かりとなった。また、シンポジウムの様子が日本精神衛生会の機関誌「心と社会」に56頁にわたって記録として残せたことで、当日に参加できなかった関係者にも経験を共有できるようになった。

教育新聞の連載は、10テーマをそれぞれ1000文字でまとめた、精神医学専門家の立場からの解説であったため、精神疾患やその教育の経験のない高校教員にも馴染みやすいものであった。発行部数が23万部のメディアであるため、全国の教育関係者に向けての発信となったという意味での地域貢献となった。

教員向け冊子の作成にあたっては、精神医学専門家の知識や経験と、教育現場の教員の声を合わせて、ユース世代の心に届く教育の手引きとなるよう工夫を重ねた。そのPDFファイルを公開したことで、全国の教育関係者や医療関係者、あるいはユース当事者や保護者が自由に利用していただけることが期待され、全国レベルでの地域貢献になることが期待される。

●実施風景



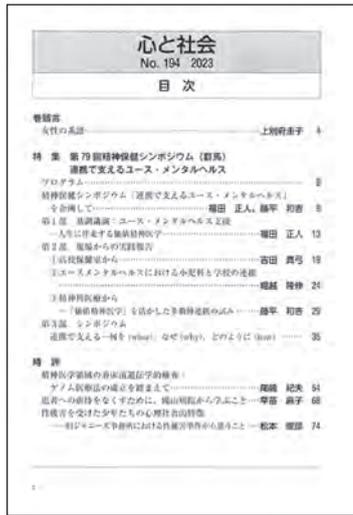
資料① ポスター



資料② 会場写真



資料③ 心と社会



資料④ 教育新聞



資料⑤ 冊子

医学系研究科・医学部附属病院

栄養管理と運動：群馬県の自然環境を生かした健康増進研修

担当学科等 麻酔神経科学分野・集中治療部

担当者 齋藤 繁 教授

●事業概要

「食健康」は群馬大学が活動展開のキーワードとしているものであり、大学での教育活動と並行して社会での認知度を高めるための活動を展開する必要がある。「医食同源・薬食同源」は古くから広く市民に認知されており、これと群馬県の自然環境を生かした運動習慣指導をつなげることで、国民の健康増進機運に呼応することができると考えられる。本事業では、近郊登山と食事の注意を組み合わせることで健康長寿につながる体が作れることを啓蒙する活動を行なった。

新型コロナウイルス感染症は引き続き蔓延する中であったが、政府の方針に則り、感染に注意しつつも集合型研修会を開催した。群馬県の風光明媚な屋外環境に実際に出向く活動も毎月実施し、報道媒体等を活用した情報提供などを心がけた。本事業の趣旨である「自然の中で無理なく体を動かすことで心身の健全さを長期に維持する療養法を群馬県民に広く啓蒙する」という目的は概ね達成されたと考えられる。

●実施事業等

申請者は群馬県の自然環境を生かした健康増進講習会活動を地元スポーツ団体等と共同で継続的に実施してきたが、本年の事業では新聞媒体を中心に広い啓蒙活動を実施した。特に2023年度は地元の上毛新聞社が全購読者に配布するJOMOTTOにおいて「誌上健康登山塾」を掲載し、次年度も本紙面での掲載を継続する予定である。また、上毛新聞社と共同して、群馬県立赤城ビジターセンターでも対面の啓蒙活動を行なった。群馬県健康長寿社会づくり推進課とは、群馬県が運営する運動推奨アプリのバーチャルウォーキング画面作りで協働しているが、当該WEB媒体による啓蒙活動も継続している。新型コロナウイルス感染症の第10波が収束に向かいつつあった2024年2月24日には群馬県消防学校において、群馬県防災航空隊の協力を得て、ヘリコプター搭載器具も使用した災害時の救護講習会も行なった。こうした活動は、「知」の拠点である大学から地元住民への社会貢献活動として意義深いものと考えている。

●本事業の成果

群馬県の山間地域では少子高齢化が進んでいるが、当該地域に居住する中高年者がそれぞれの運動習慣を確立し、健康増進活動に継続的に取り組むことが重要である。また、平野部の居住者にとっても山間部の坂道を活用した健康増進活動は生活習慣病予防に有効である。

申請者は群馬県の自然環境を生かした健康増進講習会を地元スポーツ団体等と継続的に開催してきた。そうした活動を通じて、山々に囲まれた群馬県において、効果的な健康増進法を「知」の拠点である大学が住民に提案することの意義は大きいと感じている。また、昨今は身体活動と喫食の管理を医学・保健学の科学的根拠に基づいて行うことの重要性が高まっている。屋外活動での身体的障害防止、ならびに健康被害発生時の適切な救護活動を実践できる屋外活動補助者を養成することの地域貢献度も高いと考えられる。本事業を発展的に継続させ、地域と大学の信頼関係を強固にすることで、大学の地域貢献を推進したい。

医学系研究科・医学部附属病院

救急救命士向けの病院前周産期救急対応講習の開催

担当学科等 産科婦人科、小児科、周産母子センター、救急科
担当者 田中 亜由子 医員

●事業概要

昨今、未受診妊婦の増加や分娩施設の減少に伴い、病院前で出生するケースが増加してきている。病院外での分娩に遭遇した際に、最初に接触するのは救急救命士、救急隊員であり、2人の傷病者に対し迅速且つ適切な対応を求められる。隊員が分娩介助技術および新生児蘇生法を身につけていることによって母児をより良い状態で病院に搬送することができる。しかし、実際には事例が少ないために、不安の中で活動している隊員が殆どである。

そこで我々は、群馬県内の母体・新生児救急体制の充実に向けて、救急救命士に病院前周産期救急対応・新生児蘇生法を取得してもらうこと、医療機関と救急隊員との関係構築を図り、円滑な救急搬送を行えることを目的とした、病院前周産期救急勉強会を令和4年に策定し、群馬県地域貢献事業として初めて開催した。

本年は昨年に続いての開催である。この事業を行うことによって、群馬県の周産期医療の更なる充実を目指し、しいては群馬県民の利益につながると考える。

●実施事業等

本講習会を2024年1月6日、7日に行うことを決定した。次に、群馬県内消防局・消防本部に、群馬県版病院前周産期救急講習会を文書で通知し、計19名の受講希望があり採用した。

受講生は講習会を受けるに先立ち、取得してほしい周産期領域の基礎知識をE-learningを用いて学習した。事前学習の最後に確認テストで満点を取ることをもって終了とし、一定の理解度に到達したことを確認した。

2024年1月1日に能登半島震災が発生し、多くの受講生、外部講師が災害救助活動に出動した関係で、1月6日は6名、1月7日は7名の参加となった。緊急事態の中でも集まった計16名の講師は産婦人科医師だけでなく、小児科・救急科医師、コメディカル、救急救命士と多職種であり、様々な視点からの意見を聞くことができた。

講習会では、まず群馬県の周産期・救急事情の現状に関する講義の後、群馬県で実際にあった症例を元に2種類の机上訓練を行った。

一つ目は救急要請訓練で、救急要請が入った際、少ない情報から妊婦を想定し、適切な準備ができることを目的とし、二つ目は搬送決定訓練で、妊産婦の緊急状況を判断し、適切な搬送先を選定できることを目的とした。また、シミュレーターを使用して分娩介助や肩甲難産、大量出血時の対応を取得し、午後は日本周産期新生児学会が行っている、新生児蘇生法講習会を行った。最後に、救急車内での分娩介助の困難さを学ぶため、模擬救急車内で分娩シナリオのシミュレーションを行った。

●本事業の成果

受講した救急救命士・消防職員は、元々産婦人科症例、特に周産期症例に対し、不安の中救急活動をしていた者が多かったが、講習会を通し病院前産婦人科救急に関しての知識・対応するスキルを習得し、自信を得た。今後病院前周産期救急事案に遭遇した場合に、適切な対処を自信をもって行うことができるようになることが期待される。そのような活動が妊婦および新生児の予後を改善することに繋がり、群馬県全体の周産期救急医療の質の向上につながると考える。

今回、受講出来なかった者や県内の消防本部から、次回開催の問い合わせや参加希望の声も多数寄せられており、その需要の高さが伺える。

本講習会を元に、救急隊が実際に経験した病院前周産期救急事案を共有できるような体制を作ることで、群馬県での病院前周産期救急の実情を把握することにつながる。全国でも、病院前周産期救急事案の症例を蓄積している地域は少なく、その意義は高いと考える。

今後も講習会を継続し、多くの救急救命士・消防職員に受講してもらうことにより、群馬県全域で病院前周産期救急を安全に行える環境を整えていきたい。

広報活動として、群馬大学医学部附属病院産科婦人科学教室のHPに今回の開催についての報告を掲載した。

● 実施風景



医学系研究科・共同教育学部

ゲノム医療の地域社会実装に資するゲノム科学教育のための教材開発

担当学科等 教育研究支援センター
担当者 大日方 英 准教授

●事業概要

ゲノム情報に基づいて個々人に最適された予防・診断・治療を行うことを「ゲノム医療」と呼ぶ。「ゲノム医療推進法」が2023年6月に成立し、ゲノム医療の社会実装に向けた動きが加速している。群馬県でも、群馬県・県医師会・群馬大学・県内2病院が参加する「群馬県ゲノム医療対策会議」が2022年7月に設立され、ゲノム医療を推進している。ゲノム医療が社会に広く普及するためには、地域住民のゲノムに対する理解の増進が不可欠であるが、現在、分かりやすいゲノム科学教材は不足しており、医療従事者もゲノム医療に関する教育を受けてこなかった場合が多い。

本事業では、学生のゲノム科学への興味を喚起する実習教材、最新のVR技術を活用したデジタル教材等を島津理化社、凸版印刷社とともに開発を行い、出前授業や市民公開講座、遺伝子診療部受診患者への説明等に活用することで、ゲノム医療の地域社会への普及に貢献することを目的とする。

●実施事業等

島津理化社と開発する実習教材のコンセプトについて討議を行った上で、以下の2つの実習教材開発に着手した。

1. ゲノム医療・遺伝子検査の現状と課題を俯瞰できる教材
2. ゲノムのサイズ（長さ）を体感できる実習教材

資料として作成したコンセプトシートを添付する。

コンセプトシートに基づき、実習教材の試作品をそれぞれ作成した。試作品は2024年2月1日の教養教育科目「みんなで考えるゲノム情報社会の未来」（大学1年生対象）および2024年2月14日の群馬大学共同教育学部附属中学校における授業実践（中学3年生対象）において使用し、学生のゲノムに対する理解向上に活用するとともに、製品化に向けた改良課題の抽出を行った。

また、凸版印刷社の技術を集めたVRシアター、CX体験ショールームを見学し、VR技術を活用したデジタル教材開発に関する討議を行った。

●本事業の成果

本事業期間内に2つの教材の試作品作成と授業実践へと至った。

1. 2024年2月1日教養教育科目「みんなで考えるゲノム情報社会の未来」（大学1年生）

「ゲノム医療・遺伝子検査の現状と課題を俯瞰できる教材」の活用（写真1）

受講した学生からは「ゲノム医療の現状と課題について分かりやすくまとめられている」との声があった。

2. 2024年2月14日群馬大学共同教育学部附属中学校における授業実践（中学3年生対象）

「ゲノムのサイズを体感できる実習教材」の活用（写真2）

受講した学生からは「模型や糸を使ったため、とてもわかりやすかった」、「人間の体はなんて繊細で効率的に作られているのだろう！と感動した」、「生物学、人間の細胞について興味をもった」等の声が聞かれた。

いずれも学生の理解向上や興味喚起に有効であったと考えられ、引き続き製品化に向けた取組みを進めることになった。

● 実施風景



写真1 「ゲノム医療・遺伝子検査の現状と課題を俯瞰できる教材」で学ぶ本学の学生たちの様子



写真2 「ゲノムサイズを体感できる実習教材」で学ぶ附属中学校の学生たちの様子

January 2024

教科：生物基礎と生物

コンセプトシート 1

【テーマ】
ゲノム医療・遺伝子検査の現状と課題を俯瞰できる教材

【ターゲット】
高校3年生以上の一般市民
「本校への進路説明会以外を目的とする遺伝子検査は推奨されてはいない」

【コンセプト】
- 趣味やサイゲーム性
- 遺伝子検査の現状を幅広くカバー
- 遺伝子検査に対する自らの選択を考えるきっかけを提供

【訴求ポイント】

- ▶ だれでも遊び方が知っている「次世代」がベース
- ▶ 日常生活の中で、今後自分が「事件」になり門も遺伝子検査のシナリオーションを想像
- ▶ 探検したい人向けのガイドブックを添付
- ▶ 遺伝子検査のアドバイザーとゲームアドバイザーの両面を隔りなく解説
- ▶ 今後コースが高まると予想される「京都府民カウンスラー」のキャリアパスを紹介

【必要な条件】

- ▶ 親しみやすいデザイン
- ▶ 身近な事例が題材
- ▶ 止まったマス目ごとに様々な遺伝子検査の事例を提示
- ▶ 出生前診断など最新の事例について注釈を添付
- ▶ 遺伝子検査に関する業界は国内の旅行や特産に参画したい
- ▶ ガイドブックは専門家による解説
- ▶ 電子版、紙出版の両方を用意
- ▶ 電子版ではQRコードによりガイドブックやその他の関連リンクを挿入

January 2024

教科：生物基礎と生物

コンセプトシート 2

【テーマ】
ゲノムのサイズを体感できる実習教材

【ターゲット】
本格的に生物基礎を学習する前の中学3年生～高校1年生

【コンセプト】
- 手に持って作業ができる教材
- 開始の中で遺伝情報などのように保管されているかを理解
- ゲノムのサイズを体感
- 遺伝や細胞、ゲノムへの興味を喚起

【訴求ポイント】

- ▶ 細胞、核、染色体、ゲノムの関係性を体験
- ▶ 母方・父方由来の染色体があることを理解
- ▶ 1つの染色体に含まれているゲノムの長さを知覚
- ▶ ゲノム複製の倍率を体感
- ▶ 個人間のゲノムの高さを知ることができる生徒

【必要な条件】

- ▶ 5000 塩基対より作業がしやすいサイズ
- ▶ 細胞、核、染色体、ゲノムが順番に用いられるギミック
- ▶ ゲノムが非常に長い糸状の構造をイメージできること
- ▶ ゲノムをほどいたり巻き戻したりできること
- ▶ 遺伝の入門的な授業内容と合わせて、記憶の媒体がゲノムであることを理解

保健学研究科・医学系研究科・医学部附属病院

ゲノム医療に向けた群馬県遺伝子診療体制の構築 (群馬県ゲノム医療対策会議の設立と活用)

担当学科等 看護学

担当者 小澤 厚志 教授

●事業概要

医学の進歩に伴い、生活習慣病やがんなどの疾病における遺伝子の病的バリエーション（変異）と疾病発症の関連性が次々と明らかとなってきた。これに伴い多くの遺伝学的検査は保険診療となり、またがんパネル検査など複数の遺伝子を一度に検査するゲノム医療は一般医療として全国に普及しつつある。一方で、疾患未発症者に対しての遺伝学的検査は原則的に保険外診療であり、専門的技能を有する遺伝医療従事者による対応が望まれる。群馬県は、臨床遺伝専門医、認定遺伝カウンセラー、遺伝看護専門看護師といった遺伝医療専門職人材が他県に比べて不足しており、限られた人材で、群馬県全体の遺伝医療、ゲノム医療をカバーするネットワークを構築する必要があることから、群馬大学附属病院、県立がんセンター、県立小児医療センターの遺伝医療・ゲノム医療担当者、群馬県、群馬県医師会からの担当者によってメンバーを構成して群馬県ゲノム医療対策会議を設立し、運営する。

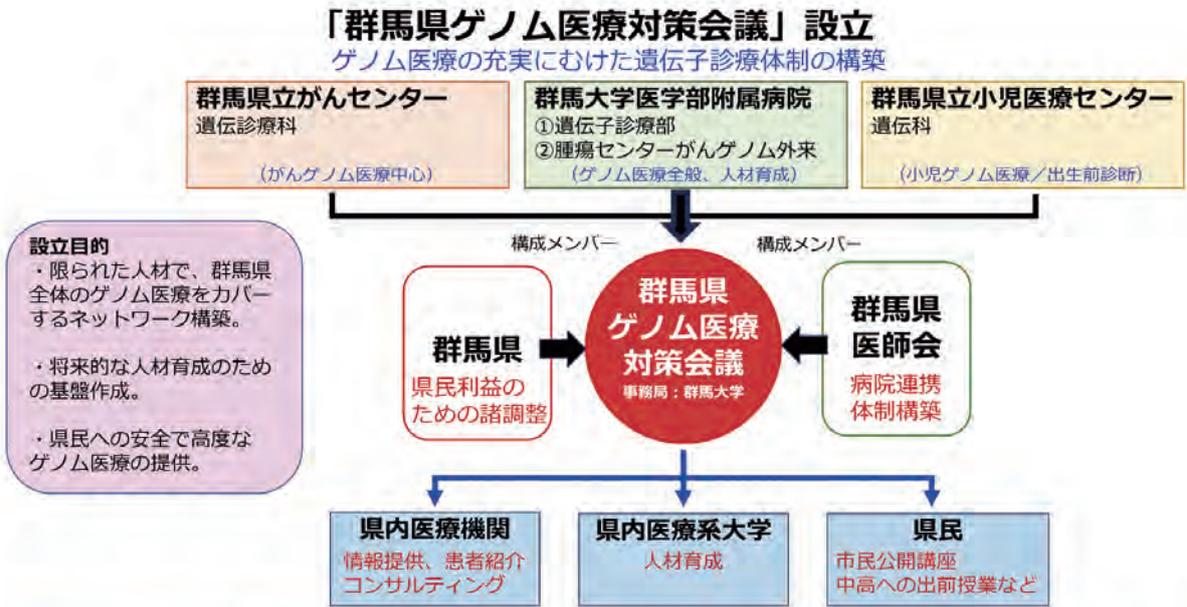
●実施事業等

これまでに遺伝カウンセリングや遺伝医療・ゲノム医療の実務にあたる群馬大学附属病院の臨床遺伝専門医、腫瘍センター所属医師・看護師、医学系研究科長、医事課事務担当者らとメールおよび対面にて意見交換を行い、「群馬県ゲノム医療対策会議」の業務内容、設立に必要な要件などを検討した。また群馬県内の遺伝医療・ゲノム医療提供機関である県立がんセンター、県立小児医療センターの担当医師、群馬県医務課担当者、群馬県医師会長との意見交換を行い、群馬大学附属病院戦略作業部会にて会議設立の説明を行い、2022年6月の群馬大学附属病院運営会議に計り、2022年7月に会議の設置が正式に承認され、会議設置運営要領を作成した。また県内の各種医療系講演会にて会議設立の意義、本会議の業務内容、進捗状況につき講演を行なった。2023年4月12日にゲノム医療対策会議発動にむけてのオンラインミーティングを開催した。

●本事業の成果

令和4年度までに、群馬県の遺伝医療・ゲノム医療における問題を、群馬大学学長に上申し、群馬県知事の山本一太氏に面会の機会を頂き、上記の群馬県の問題点につき説明し、会議設立を励行いただいた。最終的に群馬県より群馬大学附属病院内に「群馬県ゲノム医療対策会議」を設置することを提言され、群馬大学附属病院運営会議にて本会議の設置が2022年7月5日付で正式に承認された。2023年4月の有識者によるミーティングでは、県内3施設での遺伝医療、ゲノム医療の現状報告と問題点が議論され、共通の問題点としてゲノム医療従事者の人材不足、県内各所との地域連携の円滑化の必要性、医療資源の問題などの課題が浮き彫りとなった。令和5年12月13日付の上毛新聞にて、県ゲノム医療対策会議の設置と意義、目的につき紹介され、広く県民に周知されるに至った。また群馬大学遺伝子診療部ホームページにて会議の公示を行なった。さらに県と協議を進め、令和6年5-6月にかけて県庁内において、第一回の対面での会議開催が決定された。

● 実施風景



令和2～5年度「群馬大学地域貢献事業」に採択。令和4年7月5日付で群馬大学医学部附属病院会議で設置が承認。



上毛新聞 元気+らいふ vol.89 (2023-24年12、1月号)

保健学研究科

群馬県軟式野球選手を対象にした 成長期スポーツ障害検診・群馬県高校野球投手メディカルチェック

担当学科等 リハビリテーション学

担当者 田鹿 毅 教授

●事業概要

本事業は群馬県成長期軟式野球選手（小学生、中学生）群馬県高校野球投手を対象とし、成長期スポーツ障害（野球肩、野球肘、腰椎分離症、オスグッドシュラッター病）の有無並びに、全身のコンディションを調査し、個々の体の状態に応じたトレーニング指導、医療機関の受診指導を行う。また野球指導者、保護者に対し検診結果をフィードバックするとともにスポーツ障害、その予防について啓発することである。成長期の骨組織の特徴として骨端線の存在が挙げられる。このためスポーツに伴う骨端線を含む外傷、障害を発症する危険性が高い。また成長期の筋組織、腱・靭帯組織などの軟部組織の特徴として、起始・停止を骨に置く筋腱複合体の長さは骨成長により決定されるため、骨と軟部組織の成長速度の違いが表れる二次性徴出現時に相対的に筋・腱・靭帯組織に牽引力が働き、過緊張に状態が挙げられる。このため骨端軟骨層で骨端核が裂離する裂離骨折（内側型野球肘、上前腸骨棘、下前腸骨棘骨折等）や Osgood-Schlatter 病に代表される骨端症などの障害が発症しやすい状況となる。本事業はこれら成長期特有の障害を早期に発見し早期治療を指導し、健全な体のコンディション並びにスポーツ環境整備作りの一助になることである。

●実施事業等

- ① 群馬県軟式野球連盟所属学童の部・少年の部 成長期スポーツ障害検診：2024年2月12日、群馬大学医学部刀城会館で行った。小学1年生から6年生までの野球選手計201人が参加した。検診は当科整形外科医師8人、野球連盟スタッフ2名、超音波貸与会社スタッフ1名、計11人体制で行われた。昨年に引き続き、今年度もコロナ、インフルエンザ感染予防対策（3密防止）のため、肘関節超音波検査；上腕骨小頭離断性骨軟骨炎（外側型野球肘）、上腕骨内上顆裂離骨折の有無（内側型野球肘）の調査を行った。野球肘が疑われた選手は医療機関の受診指導を行った。また問診にて野球肩、腰椎分離症、オスグッドシュラッター病が疑われた選手に対しても、ストレッチ指導、医療機関受診指導を行った。
- ② 群馬県高校野球投手メディカルチェック
2024年1月21日、2月4日、2月11日の3日間、113人の高校野球投手に対し、肩関節、肘関節の超音波を用いたコンディションチェックを行った。選手のコンディションの結果は、選手、指導者にフィードバックされ、その結果をもとに、理学療法士による選手個別トレーニング指導を行った。

●本事業の成果

本年度行われた成長期スポーツ障害検診では、11名の選手が上腕骨小頭離断性骨軟骨炎（外側型野球肘）の発症を疑われた。後日11名の選手は、二次検診として当科外来、近医整形外科を受診していただき、レントゲン検査並びに診察を行い、保存加療が開始となった。症候性上腕骨内側上顆裂離骨折（内側型野球肘）は9人認められたため、医療機関への受診指導を行った。またオスグッドシュラッター病は3名の選手、腰椎分離症は1名に疑われたため、ストレッチ指導並びに医療機関への受診指導を行った。野球肘には内側型野球肘（リトルリーグ肘）と外側型野球肘（上腕骨離断性骨軟骨炎）に大別される。内側型野球肘は、骨折の一種であるため、選手は受傷当初から有痛自覚症状を認めるため、選手による発症認識は可能である。しかし外側型野球肘の発症初期は自覚症状が乏しいため、選手による発症認識が困難である。超音波検査は、関節軟骨下骨の微小な病変を描出することができるため、外側型野球肘の早期診断に有用である。早期に発見された場合、低侵襲な保存加療にて治癒する可能性が高い。しかし病期が進行期以降で発見された場合、将来手術療法に移行する可能性が高い。このため超音波を用いた本検診は野球少年の投球障害の予防、啓発、早期発見の観点から、有意義と思われる。保護者、指導者、我々医療従事者が選手の健康を第一として、選手の健全なコンディションを構築、維持するために協力することが重要と思われる。本事業を通じて経年的に検診を行う事により成長期スポーツ障害を早期発見し、適切な治療対応へ導くことが期待できる。選手が楽しく、安全に野球が行えるよう、これからも務めていきたい。

1. 成長期スポーツ障害検診

① 受付にて選手の体温チェック



② 身長、体重、体組成検査



③-1 超音波検査による野球肘検診



③-2 超音波検査による野球肘検診



③-3 超音波検査による野球肘検診



③-4 超音波検査による野球肘検診



③-5 超音波検査による野球肘検診



④ 保護者・野球指導者への野球肘検診結果説明



保健学研究科

学生保健サポーターによる地域ボランティア体制の構築

担当学科等 地域保健推進室

担当者 佐藤 由美 地域保健推進室長・教授、他 11名

● 事業概要

保健学科全専攻・学年を対象とした教育と地域貢献を一体化した取り組みである学生保健サポーターの養成と学生保健サポーターによる地域ボランティアの体制を構築する。前橋市社会福祉協議会との連携関係を基盤に、地域の子育て世帯や高齢者のニーズにあわせた学生主体のボランティア活動に取り組む。3年目の今年度は、大学院修了生ネットワークと在校生との交流を加えることにより、現場の保健医療職の協力を受けたボランティア活動に発展させる。

● 実施事業等

1) 学生保健サポーター養成

全7回(10/4-12/23)実施し、大学院生を含む19名が受講した。前橋市・社協職員、国立赤城青少年交流の家職員、子ども食堂主催者、若宮地区自治会長を招聘し、講義・演習を実施した。またサポーター経験者が活動報告を行った。

2) 学生保健サポーターによる地域ボランティア活動の企画・実施

- ①前橋市若宮地区「群大保健学まちなか交流サロン」：2/16に学生主催・企画によるサロンを開催した。地域住民が24名参加し、介護予防体操や手作業などを行って、交流した（学生7名、教員6名）。
- ②その他のボランティア活動：前橋市内において、子ども食堂こまがたつくしに延17名、下川淵子育てサロンに延6名、おもちゃの図書館に延5名、はつらつかフェに延5名、認知症を語るカフェに延4名、計延37名が参加した。
- ③これまでの本学の活動が評価され、2/17に前橋市社会福祉協議会主催『まえばし地域共生フォーラム』において実践報告を担当した（参加者は一般市民400名）。

3) 大学院修了生ネットワーク交流会の開催

2/17に交流会を開催。
修了生(看護学・生体情報検査科学・リハビリテーション学から各1名)が活動報告を行い、その後参加者で意見交換を実施。22名参加。

● 本事業の成果

- ① 参加住民の反応から、子どもとその保護者、高齢者等の保健福祉の充実、住民の社会参加や相互交流促進、孤立化防止、QOL向上の場が提供できた。
- ② 学生主体の取り組みにより、住民生活の理解や行政・団体、住民組織との連携・協働等に関する学生の early exposure の場とすることができた。参加した学生の評価として、地域保健医療への関心の高まりとボランティア活動への意欲の高まりが確認できた。
- ③ 看護、検査、理学、作業の各専門性はもとより、分野横断的な協力により保健学研究科が少子超高齢社会に直面している地域への地域貢献事業として地域にアピールできた。

学生保健サポーター養成講座の様子



学生保健サポーターとして地域で活動するために、子どもや高齢者の方々と交流やレクリエーションの方法を「国立赤城青少年交流の家」の講師の方より学びました。令和5年度は、19名の学生が養成講座を修了し、新たに学生保健サポーターとなりました。

学生保健サポーターの活動の様子



子どもと関わるボランティア活動では、「こども食堂こまがたつくし」と「下川淵子育てサロン」で活動しました。

「こども食堂こまがたつくし」では、こども食堂の運営の補助をしたり、子どもたちと交流をしたりしました。また、クリスマス会にも参加し、ゲームの企画・運営や参加されている親子との交流を楽しみました。

「下川淵子育てサロン」では、読み聞かせやパペットシアターをスタッフの方々と一緒に行い、参加されている親子と交流しました。



「認知症を語るカフェ」の活動に参加しました。参加されている当事者およびご家族と一緒に作品づくりをしたり、会話を楽しんだりしました。

まちなか交流サロンの様子



前橋市若宮地区で開催したまちなか交流サロンには、多くの地域住民の方々が参加してくださいました。学生保健サポーターが企画したゲームやピンシャン！元気体操を行ったり、一緒にエコバッグづくりをすることを通して交流したりしました。

修了生ネットワーク交流会の様子



「大学院修了後の研究・大学との関わり」というテーマのもと、3名の修了生から大学院で行った研究を職場の業務改善に繋げた取り組み、業務で忙しい中で効率的に研究に取り組むための工夫や便利ツールの紹介、同門会を通じた、共同研究の取り組みなどが報告されました。終了後も熱心に意見交換が行われました。参加者から、刺激をもらった、励みになる等の感想が寄せられました。

総合情報メディアセンター

一般大学生向け情報セキュリティ講習の作成

担当者 西村 淑子 センター長

● 事業概要

群馬県警察および本学の学生と連携し、県内の一般大学生向けに短時間で情報セキュリティに関する知識を提供する講習コースを作成した。近年増加傾向であるフィッシング詐欺に焦点を当て、安全で安心なデジタル環境の普及を目指す。

また、情報提供サイトを構築し、県内大学生に対する情報セキュリティレベルの向上とサイバーセキュリティボランティア支援の推進を行う。今後は講習コース内容の充実に努め、参加者がより効果的に情報セキュリティに関する知識やスキルを習得できるよう取り組む。

● 実施事業等

群馬県警察のサイバーパトロールコラボレーターボランティアに参加している本学の学生とともに、一般大学生向けに情報セキュリティに関する知識を短時間で習得できる講習コースを作成し、県内大学に提供する環境を整えた。

近年増加傾向であるフィッシング詐欺に焦点を当て、フィッシング詐欺に関する基本的な知識を短時間で習得できる内容として作成し、県内の一般大学生を対象に情報セキュリティ意識の向上を促進し、安全で安心なデジタル環境の普及に寄与することを目的としている。また、本学ホームページの総合情報メディアセンター地域貢献事業へ掲載するとともに、学内の総合情報メディアセンターニュースにて周知した。

● 本事業の成果

群馬県大学等サイバーセキュリティ共同対処協定を通じて、群馬県警察と共同でサーバーを構築し、「群馬県大学等サイバーセキュリティ支援連絡会サイト」を群馬県警察が作成した。

サイト構成としては「県内の一般大学生向け情報セキュリティ講習Moodle（本学作成）」および「サイバー防犯ボランティア支援事業サイト（群馬県警察作成）」となっている。これにより、本学による情報セキュリティ教育の普及および群馬県警察ボランティア支援事業の情報提供を行い、県内大学への情報セキュリティレベルの向上およびボランティア支援情報発信に寄与することができたと考えている。

今後も、講習コースをさらに充実させ、参加者が情報セキュリティに関する知識やスキルをより効果的に習得できるよう取り組むとともに、より質の高い講習コースを提供していく。



生体調節研究所・重粒子線医学研究センター

高校生のための最先端生命科学&重粒子線医学セミナー

担 当 者 佐々木 伸雄 教授・大野 達也 重粒子線医学研究センター長

● 事業概要

本事業は、生体調節研究所と重粒子線医学研究センターの連携により、本学の基礎及び臨床医学の最先端を幅広く体験できるセミナーである。今年度はスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校の群馬県立前橋女子高等学校から生徒20名程度を本学に招き、生体調節研究所における生命科学研究についての解説と実験室見学、並びに重粒子線医学研究センターの治療施設見学と最前線治療についての講義を予定している。さらに、研究者らがそれぞれの体験談やキャリアパスについて講義をする。

これら体験学習は、進路選択を控えた高校生が生命科学研究や基礎研究、臨床医学研究に対する興味を喚起するとともに、理系分野を具体的に将来の進路の候補として捉えてもらうための貴重な機会を提供するものである。

● 実施事業等

2024年3月16日（土）に群馬県立前橋女子高等学校の生徒18名と同校の引率教諭4名が参加した。

新型コロナウイルスが5類に移行後も感染防止対策を講じ講義並びに見学を行い、見学は2班編成にて以下の内容を交互に聴講、見学していただく形をとった。

1. 実験施設見学（生体調節研究所・生体膜機能分野）
2. 治療施設見学（重粒子線医学センター シミュレーション室 等）

「研究者・医師としての 生き方・学び方」と題し、2名の若手研究者が職業としての研究職、医師について講義を行った。

1. 生体調節研究所・生体膜機能分野
佐々木 妙子 助教
2. 医学系研究科腫瘍放射線学講座
田村 翠 医員・大学院生

● 本事業の成果

県内のSSH指定校を中心とする高校の生徒に向けて本学の特色である最先端の生命医科学や重粒子線医学の現場を身近に体験し、各々の研究に従事する大学教員から話を聞ける場を設け、参加者にそれぞれの先端技術と研究内容を分かりやすく解説した。

さらに研究者がそれぞれの体験や自身のキャリアパスについての助言を含む内容を講義し、生命科学分野を具体的に将来の進路の候補として捉えてもらうための貴重な機会となった。以上の一連のセミナーに対し、参加した高校生からは例年にも増して多くの質問が寄せられたことから、本セミナーに積極的に参加し、そのうえで研究への深い関心や興味を抱いた様子がうかがえた。本事業は「知の拠点」として本学の活動を広く知っていただき地域社会へ還元するだけでなく、グローバルな視点で活躍できる新たな若い人材の育成にも繋がる大変意義がある活動であり、高大接続の模範ともなる意義のある活動として今後も長く継続する方向である。

令和5年度 群馬大学地域貢献事業 「高校生のための最先端&重粒子線医学セミナー」

令和6年3月16日(土) 10:00~12:30



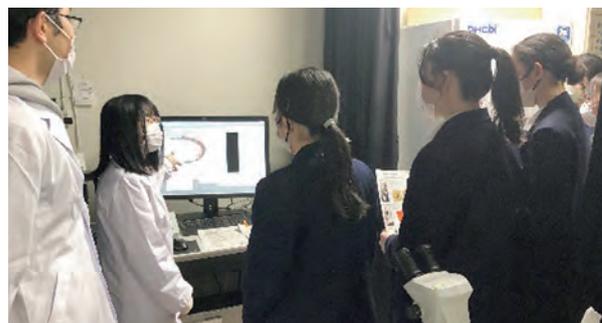
開会式、閉会式の挨拶
左より、佐藤 健 所長、大野 センター長、稲垣 副所長



講義を担当した
佐々木 助教、田村 医員 (大学院生)
左は、司会進行の佐々木 教授



顕微鏡で線虫の観察



共焦点顕微鏡でのデモンストレーション



治療室で照射方法の説明



加速装置の説明



参加者からの質問に答える、担当者一同

重粒子線医学研究センター

重粒子線治療の施設公開と公開講座

担当者 大野 達也 重粒子線医学研究センター長

● 事業概要

群馬大学は2010年より群馬県との共同事業としてがんの重粒子線治療を行っている。保険適用で治療できる疾患も増加し、治療人数は7000名を超えている。しかし、重粒子線治療施設は世界でも10数施設程度の希少な施設であり、その認知度はいまだ十分でない。群馬大学、群馬県では県民の日に合わせて施設公開、講演会を継続的に実施してきた。

本事業は、群馬県と重粒子線医学推進機構及び医学部附属病院の連携協力により、一般市民への情報発信を行うことで重粒子線治療の理解、普及を図るものである。普段は一般公開されていない加速器や治療室等の見学、説明で重粒子線治療の理解を深めてもらう。また、あわせて、一般市民向けの公開講座を実施することで、重粒子線治療に関する総合的な理解を深める。施設見学会は医学祭と同日開催に、公開講座は医用原子力技術研究振興財団と共催とし、充実を図る。

● 実施事業等

施設見学は2023年10月28日(土)13:00～16:00に行われた。当日昭和キャンパスにて開催された医学祭とも連携して開催した。施設内の加速機室、治療室、準備室等、自由見学制にて見学が行われた。それぞれの場所でパネルや動画による解説を行った。若者向けの企画として「スタンプラリー」と「子ども向けアクティビティ:診療放射線技師のおしごと体験」も行われた。

公開講座は、医用原子力技術研究振興財団との共催で、市民向け公開講演会「心と体にやさしい重粒子線がん治療」と題し、2023年9月24日にGメッセ群馬メインホールにて行った。医用原子力技術研究振興財団の辻井博彦副理事長と附属病院齋藤繁病院長から挨拶の後、第1部として高崎チェンバーミュージックソサエティーによる演奏会、第2部として各疾患の重粒子線治療適応、治療方法、治療成績などの概要について

- ・前立腺癌：河村教授
- ・肺癌：岡野准教授
- ・子宮癌：安藤講師
- ・肝癌：渋谷講師

の担当で講演を行なった。講演内容は群馬大学公式YouTubeチャンネルでも公開した。

● 本事業の成果

施設見学は約600名の参加であった。医学祭との併催であり、若年者や家族連れの参加も多く見受けられた。「子ども向けアクティビティ:診療放射線技師のおしごと体験」も多くの参加をいただいた。公開講座については、約260名の参加であった。講演内容についての動画もすでに約600回視聴されている。アンケートではとても満足、満足が96%におよび、聴講者の満足度は高く、内容がわかりやすかった、まあまあわかりやすかったが100%であり市民の重粒子線治療に対する理解の向上について貢献しているものと思われる。重粒子線治療の施設見学、公開講座についてはコロナウイルス感染症の影響などで毎年実施形態を変更しているが、開催ごとの工夫により、広範囲に情報提供が行えるようになったと考えている。施設見学者数は増加しており、また、医学祭の共催や企画により従来の参加者より若い層に対して重粒子線治療への関心を増加させることができたと考えている。重粒子線治療の幅広い層での理解が広まり、将来の職業選択等への寄与も期待される。

18 | 2023.8 (月) | 19日 | 上毛新聞 | 上毛 | 医療 | がん | がん治療施設

医療の真・安全管理

患者が医療者と信頼関係を築き、納得して医療を受けられる体制を構築するため、群馬大学附属病院は「安全・納得・信頼の医療」を提供することを基本方針に掲げている。医療の真・安全管理は、院内の各部門・部署とも連携し、医療の真と安全の両立に多職種で協働して取り組んでいる。

信頼と安心 対話で深化

医療者の真と安全の両立は、医療の真・安全管理を担う。安全確保に関する業務を担う「リスクマネージャー（R.M.）」は、田中真由美（真由美）をはじめ、前田麻由（麻由）、佐藤 雅博、高橋のり子、中野 真由美ら、多岐の職種で、専門性と連携して、院内の各部門・部署と連携して、真と安全の両立に多職種で協働して取り組んでいる。

意思決定に患者の声

病院は「対話で得る。患者参加の医療」を基本方針に掲げ、患者の声を聴き、考え、行動する。医療方針をよく説明して、お互い納得した上で意思決定を行うことを重視している。院内各部門は日々の診療の中で、患者の声を聴き、考え、行動する。医療方針をよく説明して、お互い納得した上で意思決定を行うことを重視している。院内各部門は日々の診療の中で、患者の声を聴き、考え、行動する。

19 | 2023.8 (月) | 19日 | 上毛新聞 | 上毛 | 医療 | がん | がん治療施設

心と体にやさしい 重粒子線がん治療

9/24(土) 13:30-19:00

群馬大学医学部附属病院

2023.8.9 上毛新聞
「元氣+らいふ8月号」広告（共催講演会）

19 | 2023.8 (月) | 19日 | 上毛新聞 | 上毛 | 医療 | がん | がん治療施設

がんは「話す」「食べる」のみで済む

がんは「話す」「食べる」のみで済む。がんは「話す」「食べる」のみで済む。がんは「話す」「食べる」のみで済む。

歯科口腔・顎顔面外科

群馬大学附属病院歯科口腔・顎顔面外科は口腔がんといった腫瘍が大きく切除するケースがある。がんのほかに、先天・後天的な口唇の歪みや歯並びの悪化など、歯並びの悪化や機能障害を最小限にする治療、外傷を治療している。院内トップクラスの治療実績がある口腔がん治療施設である。

プロトコルを作成

口腔がんは舌や上下の唇、頬、鼻などできるが、他のがんとは違って患者数が少ない。がんは「話す」「食べる」のみで済む。がんは「話す」「食べる」のみで済む。

復帰支える高度な技術

がんは「話す」「食べる」のみで済む。がんは「話す」「食べる」のみで済む。がんは「話す」「食べる」のみで済む。

20 | 2023.10 (月) | 11日 | 上毛新聞 | 上毛 | 医療 | がん | がん治療施設

重粒子線がん治療施設 見学会

10月28日(土) 13:00-18:00

群馬大学医学部附属病院

2023.10.11 上毛新聞
「元氣+らいふ10・11月号」広告（施設見学会）

令和5年10月25日（水）上毛新聞 21面

がんの重粒子線治療施設を公開

28日に群馬大 昭和キャンパス

がんの重粒子線治療に理解を深めてもらおうと、群馬大は28日午後1時から、前橋市の同大昭和キャンパスにある重粒子線医学センターで治療施設見学会を開催。普段立ち入れない内部を公開し、身近で見学できる。参加無料。

他に重粒子線治療を解説するポスター展示を設ける。子育て世帯や若者にも親しみやすいようスタンプラリーや、子どもが白衣を着て放射線技師を疑似体験できるイベントも予定している。

医学部学園祭との同時開催。申し込みフォームQRコードで事前受け付け中。問い合わせは同大(☎027・220・7895)へ。

2023.10.25 新聞記事
(上毛：がんの重粒子線治療施設を公開)



■ information

群馬大学地域連携推進室

前橋市荒牧町四丁目2番地 群馬大学事務局内

tel 027-220-7544 (直通)

fax 027-220-7515

E-mail : tiikir-s@ml.gunma-u.ac.jp

URL : <http://www.gunma-u.ac.jp/research/res003/g1948>



群馬大学
GUNMA UNIVERSITY

*表紙ロゴマーク

「国立大学法人群馬大学ロゴマーク」
平成18年4月制定

群馬大学の英文頭文字『G』をモチーフに緑と青で豊かな自然環境を示し、学生の成長と活躍をイメージして、新しい未来の創造と社会へ貢献する大学の存在感を表現しています。